ＩＴ時代の俳句のさまざま

私のパソコンの「お気に入り」には、「連句結社猫蓑」・「芭蕉（ｂａｓｈｏＤＢ）」・「蕪村論と石華舎目録」などが入っている。これらのものを参考にしながら、何時の日か「巴人ワールド」などのホームページを持ちたいと思っているが、なかなか実現しそうにもない。その出だしの構想は次のようなものである。

○　鳥（とり）既（すで）に闇（くらが）り峠年たつや　　早野巴人

〔**俳句を味わう（俳句鑑賞）**〕　季語は「年立つ」（新年）。この作者の早野巴人（のちに夜半亭宋阿）は、下野国（栃木県）烏山出身の俳人であるが、とりわけ蕪村の俳句の師としてよく知られている。（掲載の夜半亭一世の巴人像は夜半亭二世となる蕪村が描いたものである。）さて、この句の「闇（くらが）り峠」は、「奈良県生駒町から生駒山を越え、大阪府東大阪市枚岡に下る古道の峠」とのことである。すると、この句の意味は、「（あの大晦日の西日を受けて飛んでいった）鳥は、既に、（生駒山の）闇（くらが）り峠を越えて、新しい年の夜明けの空を飛んでいるのであろうか」とでもなるのであろうか。ところが、どうやら、この「鳥（とり）」は、大晦日の「掛け取り」（借金取りの「とり」）とのことなのである（宇都宮大学名誉教授・丸山一彦説）。すると、この句の意味は、「大晦日の借金取りの野郎は、大晦日の暗がり峠を既に越えたのであろうか。そして、もう既に、新しい年を迎えたのであろうか。もし、そうならば、借金を返さずに晴れてこの新年を迎えることができるというものだが　――」となりそうなのである。「俳句を創る」ということ以外に、このような「俳句を味わう」ということにも是非とも目を向けて頂きたいと思うのである。

〔**俳句を創る（俳句創作）**〕　明治時代の正岡子規の「俳句革新」以来「俳句を創る」ということは、とりもなおさず、次の連句（「三つ物」形式の連句）の冒頭の「発句（ほっく）を創る」ということで、その次に出てくる「脇・第三」のような付句（つけく）は何処かに置き去りにされてしまったのである。これまた、ＩＴ時代の昨今、パソコンを駆使しながら、未知の多くの人と、俳句・連句の共演（協演）をしたいとしみじみと思うのである。次のものは、江戸時代の巴人の発句（俳句）に、ＩＴ時代の私が脇句をつけ、それに、明治・大正・昭和の三代にわたり「川柳六大家」の一人として活躍した宇都宮出身の前田雀郎の句をもってきたものである。

（発句）	鳥既に闇（くらが）り峠年たつや	（五・七・五）	巴人
（脇）	独り侘しく屠蘇に酔いけり	（七・七）	晴生
（第三）	正月も三日の寒き夜となり	（五・七・五）	雀郎

〔**俳句を知る（俳句史・俳句評論・俳句研究）**〕　さて、「俳句を味わう」・「俳句を創る」ということの他に「俳句を知る」という世界もある。この世界こそＩＴ時代に何か一番の果実をもたらしてくれるような予感をしているのである。その予感を是非とも「蕪村論と石華舎目録」などを見て確かめて欲しいと、そんな思いに駆られているのである。

（江連晴生記）